

Title	戦国後期の南常陸と多気城
Author(s)	竹井, 英文
Citation	一橋研究, 34(3): 33-46
Issue Date	2009-10
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/18014">http://doi.org/10.15057/18014</a>
Right	

## 戦国後期の南常陸と多気城

竹 井 英 文

### はじめに

近年の城郭研究は、戦国大名系城郭論批判や「杉山城問題」などにより、その方法論そのものの再検討が要請されるに至っており、東西問わず大きな節目を迎えていることは、城郭研究者の間ではもはや共通認識となつていよう<sup>1)</sup>。

そうした中、文献史学を専門とする筆者は、このような状況を打開し、新たな学際的研究を行うために文献史学が行うべきことは、個々の城郭の歴史的位置を文献史料から明確にすることであるという問題意識のもと、これまで若干の検討をしてきた<sup>2)</sup>。筆者の一連の研究は、極めて基礎的な作業に過ぎないのだが、実はこれまでの城郭研究では、そうした作業が不十分と言わざるを得なかったことがわかってきたのである。よって、今後もこうしたスタンスを維持しつつ、従来城郭研究の中では十分検討されてこなかった文献史料に光を当て、議論の基礎となりうる情報を確定させていく作業を地道に続けていこうと考えている。

本稿で検討する、茨城県つくば市北条に所在する巨大山城、多気城（多気山城、城山城）も、これまで基本的には文献史料に登場しない「謎の城」とされてきた城郭の典型例である。多気城は、茨城県内有数の規模と構造を誇る城郭として、以前から研究者の間では有名だったが、その歴史的 position は、周辺の歴史的状況から推測される程度であった。しかし、多気城関連の文献史料が、実は近年刊行された『牛久市史料』に収録されていることは、あまり知られていない。本稿は、その史料をもとに、多気城の歴史的 position を可能な限り明らかにし、今後の多気城をめぐる議論、さらには常陸国の戦国史研究、城郭研究に寄与しようとするものである。

## 1. 多気城の研究史

本章では、多気城がどのような城で、従来の研究ではどのように評価されてきたのかを整理し、議論の前提としたい。

多気城は、茨城県つくば市北条字城山にある城山（比高約一〇〇m）に築かれた城郭である。後述するように、戦国期にこの地域を支配していた小田氏の居城、小田城の北方約5kmに位置する。山麓には、戦国期に存在していた小田氏一族・北条氏の居城である北条城や、明応年間には存在していた、同じく小田氏一族・小泉顕家の居館である小泉館、その他数多くの中世遺跡がある（図1・2を参照）<sup>93</sup>。

城は、大きく四つの曲輪より成り立っている（縄張図を参照）。Ⅰ曲輪が本丸・主郭に相当すると考えられ、内部に低い土塁をめぐらして二重構造となっている。曲輪全体が幅一〇m、深さ八mの空堀で二重に囲まれており、南側の虎口を抜けると「馬ノリバ」といわれる広い尾根に出て、Ⅱ曲輪北側の虎口に着く。Ⅱ曲輪も一部二重堀で囲まれており、東側にも虎口がある。それを抜けるとⅢ曲輪に出る。Ⅲ曲輪は、西側以外の三方に横堀を巡らしているが、この堀はⅠ・Ⅱ・Ⅲ曲輪をまるごと囲む巨大な横堀の一部を形成している。Ⅱ曲輪の西側にはⅣ曲輪もあり、これは他の曲輪と比べてやや独立的な位置にある。尾根を断ちきる堀切がないことも特徴として挙げられる。

また、遺構は山裾部にも存在しており、総構とも呼ぶべき外郭線の横堀が、山裾を数千メートルにわたって巡らされていることがわかっている。これも、この城の大きな特徴の一つとされている。

このように、多気城は、大規模かつ技巧的な城であることがわかるが、このような城は茨城県内ではほとんど見られない、特異な城であることも指摘されている。俗に県内随一の山城と云われる所以である。

次に、多気城に関する先行研究を整理したい。近世の地誌類や伝説によると、平安時代中期に、常陸大掾平維幹という人物が、近くの水守宮所から移り、多気太郎を名乗ったといわれている。また、『吾妻鏡』によると、その子孫である多気義幹が、建久三年（一一九二）に「多気の山城」に籠城する事件が発生している。これが多気城に関する唯一の文献史料とされており、おおよそ『日本城郭大系』<sup>94</sup>までは、これをもとに鎌倉期の城郭として評価する傾向にあった。

ところが、『図説中世城郭事典』<sup>5)</sup>では、従来とは異なる評価がされることとなった。「城山城」の項の執筆者である藤井尚夫氏は、詳細な縄張図を作成し、大きく二つの特徴を挙げている。一つは、「山城形式の占地をしているが、中世の山城に良くある、根小屋式山城ではなく、その城域は、頂部の曲輪群の周囲の斜面すべてを城内として取りこむ外郭線が巡っていること」、もう一つは、「一般の山城の防備構築物である堀切がほとんどないこと」である。尾根を堀切で断ち切ることなく、曲輪や斜面に横堀を巡らし、山裾の外郭線も、およそ三〇〇〇m続いているという、非常に特異な構造を持つ城であることを指摘したうえで、「土砂の移動量、距離は、必要最小限で済ませ」た純軍事的、一時的な城とし、「この城が現在見られる形に作られたのは、永禄から天正頃のこの地域での戦乱時か、または、関ヶ原の戦いの直前の緊張時であったと考えられる」と評価したのである。従来の研究とは異なり、縄張図の作成によってその規模・構造を具体的に明らかにすると同時に、築城時期や築城主体にまで踏み込んで考察しており、多気城の研究史における一大画期といえよう。

その後、発刊された『筑波町史 上巻』<sup>6)</sup>においても、藤井氏は藤本正行氏と連名で、多気城（「城山城」）の項を執筆している。そこでは、その縄張をより詳細に説明しつつ、「ある大勢力が、当地方で軍事的緊張が高まった時期に、純軍事的使用を目的として、短期間で一挙に築いた」としている。そして、築城時期については、「横矢がかりを意識した虎口の構造や、単調な外郭線で町場を囲んでいることなどから推して、戦国の後期とみられる」「より具体的には、当地方を領有していた小田氏と、周辺の佐竹氏、多賀谷氏、結城氏、真壁氏らが抗争を繰り返した弘治～天正年間か、のちに水戸を居城とした佐竹氏と徳川家康の間が緊張関係にあった慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の役前後の時期が考えられる」と評価している。基本的には、『図説中世城郭事典』段階の評価と大きく変わっていないといえよう。

こうした評価は、最新の研究成果の一つである、『図説茨城の城郭』<sup>7)</sup>でも同様である。そこでは、その縄張構造を分析しつつ、「上杉謙信の小田城攻めのために築かれた城か、あるいは佐竹義重の小田城総攻撃のための付け城か、はたまた関ヶ原合戦前後の緊張した状況下で佐竹義宣が構築したものか、等々いくつも推測がなされている」とし、「いずれにしる膨大な工事量の割に要所に工事を集中していることから、純軍事的使用を目的とした臨時築城的なものだっ

たと思われる」と、基本的には従来と同様の評価を下している。

以上のように、多気城についての評価は、主に縄張論から行われていたが、近年、つくば市教育委員会による発掘調査が行われ、新たな事実が明らかになりつつあることは注目される。調査は、平成十三年度・十四年度に行われ、平成二十一年現在も行われている。

平成十三年度の調査では、Ⅰ曲輪（主郭）の測量と、主郭中心部の一部にトレンチによる発掘調査が行われた。二つの遺構面と若干の遺物が確認され、遺物は、表土層を主に出土したロクロ成形の土師質土器皿とすり鉢、土鍋などの在地土器、土塁表土層及び平坦面造成土から出土した丸底の土師質土器皿の、大きく二相に区分できるといふ。表土層の遺物は、戦国期から江戸初期頃、土塁盛土層などからの遺物は、室町時代頃と推測されているが、遺物の量が少ないことから、臨時的な城郭という従来の評価に合致する状況にあるとしている<sup>(8)</sup>。

平成十四年度の調査では、Ⅰ曲輪とⅡ曲輪西側斜面が主な調査対象とされた。堀・土塁・虎口と、前年度と同様に二つ以上遺構面が存在することが確認された。第一面では、盛土による曲輪造成の様子が確認されたと同時に、石積みの存在も明らかとなったことが注目される。第二面では、手づくね成形の土師質土器皿が大量に出土しており、第一面と比較して土地利用の痕跡が明確だが、Ⅰ曲輪・Ⅱ曲輪を中心とした山上付近のみの土地利用と推測されている。遺物の年代だが、第二面から出土の土師質土器皿は室町期、その他の土師質土器や手づくね成形の皿などは、室町～戦国期と推測されるが、陶磁器が出土しておらず、正確な年代は特定できないとしている。また、火災の痕跡や鉄砲玉なども確認されず、現在見られる最終形態になってからの使用はほとんどないとも推測されている<sup>(9)</sup>。

そして、最新の平成二十一年度の調査では、さらに注目すべき成果が出ている。調査範囲は、Ⅰ曲輪とⅡ曲輪及びその周辺部分で、同年九月一三日に現地説明会が行われた。その資料及び説明によると、①Ⅰ曲輪・Ⅱ曲輪を二重に囲む堀は、山地の斜面を二～六mの幅でV字形に掘り窪めたもので、内側・外側には土塁を築き、内側土塁からの深さは六～一〇mにもなる、②土坑・柵列・石列も確認され、防御上の工夫と考えられる、③建物遺構は未確認、④新たに十六世紀後半頃の内耳土鍋やかわけ（真壁系のものという）、十五世紀前半

頃のかわりけも発見され、前者の量は非常に少なく、後者の量が多い、⑤土塁等に明確な造り替えの痕跡がなく、造りも荒いため急造の様子が窺われる、などの事実が明らかとなった。これを踏まえて、調査者は、非常時に籠もるための城であり、実際に戦闘には使われなかったこと、明確な造り替えの痕跡がないことから、現在見られる姿は十六世紀後半になってから築造されたものと評価している。十六世紀後半の遺物が若干ながら出土し、造り替えの痕跡が無いことは注目されよう。

以上、多気城の研究史を概観してみた。多気城は、これだけの規模・構造を持ちながらも、その歴史的位置については、上杉謙信や佐竹氏との関連、あるいは関ヶ原の戦いとの関連などが推測されるに留まっており、ほとんど不明とされてきたことがわかる。また、その性格としては、在地領主の居城ではなく、軍事的・臨時的な陣城のようなものという評価が、研究者間の共通認識となりつつあることも窺われる。そして、近年の発掘調査の成果も、これらを裏付ける結果となっている。これらを踏まえて、次章では、多気城関連の文献史料を検討し、多気城がいつ、どのような歴史的背景のもとで存在した城郭だったのかを明らかにしたい。

## 2. 多気城の「再興」

本章で検討する、多気城関連の文献史料は、次の史料である<sup>10)</sup>。

弘治二丙辰、<sup>(氏 康)</sup>ウジヤスヨリ小田落城、

永禄七甲子正月廿二日陣寄、廿九日落城、十一月五日甲辰日佐竹ヨリ打入、

十二月カケトラヨリ正月廿九日落城、癸酉日也、

永禄八乙酉十二月十三日夜、土浦ヨリ打入、小田へ、

永禄九丙子二月十六日小田開城、<sup>(景 虎)</sup>カゲトラヨリ御意ヲモツテ、

永禄十二乙巳十一月廿三日、小田落城ナリ、東方テ卦合候之上、

永禄十三庚午二月十二日、信田殿シヨウガイ、

元亀元庚午十一月拾日、豊田開城スルナリ、

天正三乙亥六月十七日、<sup>(榎 本)</sup>エノモトヤカタウチシニ、開城廿二日、

天正五丁丑六月ヨリ飯沼天神宮新地取ナリ、

天正六戌子七月廿五日乙亥日、<sup>(木 田 余)</sup>木田里落城、九月ハキヤクス、

天正七己卯，上菅間見地ナリ，正月十八日見初ル，八月百姓ツクナリ，見地片岡紀伊守所行ナリ，○同年七月廿四日ヨリ北条嶽山再興，○同七月廿二日下妻館夜煙生，戌時也，

天正八庚辰二月廿四日，谷田辺落城，甲午日ナリ，○同当十二月十七日開也，天満宮，甲午日也，

天正十壬午六月小山殿死，乙亥十一日小山開ク，

この史料は、「明光院記」というもので，小田を中心とした南常陸の情勢を記した年代記風の記録である。『牛久市史料 中世Ⅰ』に収録されており，既に先に挙げた平成十四年度の発掘調査報告書でも，その存在が指摘されているが，本格的に検討した研究は管見の限り存在しない<sup>10</sup>。

注目すべきは，傍線部分の「北条嶽山再興」という記事である。では，「北条嶽山」とは，どの城を指すのだろうか。「北条」は，現在のつくば市北条とみて間違いあるまい。そして「嶽山」も「多気山」と考えるのが無難である。よって，ここから，天正七年（一五七九）七月二十四日に多気城が「再興」されたことが判明するのである。それでは，「明光院記」という史料は，どのような性格の史料なのだろうか。

「明光院記」とほぼ同一内容の史料として，「吉備雑書抄書」<sup>11</sup>「大蔵卿筆記」<sup>12</sup>という記録が存在している。これらの中でも，「吉備雑書抄書」は弘治二年（一五五六）から慶長三年（一五九八）までと一番記事が多く，「大蔵卿筆記」は永禄九年（一五六六）・十二年（一五六九）・天正十三年（一五八五）のわずか三年しか記事が無い。また，記事の内容は，それぞれで多少の違いが認められており，今回問題となる傍線部分「同年七月廿四日ヨリ北条嶽山再興」という一文は，「明光院記」にのみ書かれている。

「吉備雑書抄書」については，『牛久市史料』の解説に詳しい。それによると，「中菅間村明光院所蔵古書，題曰吉備雑書」「永禄五年壬戌卯月五日書畢。筆者上菅間住僧大蔵卿」「抄書」という注記が見られるという。つまり，原本として「吉備雑書」という書物があり，それを筑波郡上菅間村（現つくば市）の某寺住僧大蔵卿が永禄五年に抄出し，隣村中菅間村明光院に伝わったものが「吉備雑書抄書」なのである。「明光院記」「大蔵卿筆記」も，おそらく「吉備雑書」あるいは「吉備雑書抄書」をもとに作成された写しのような性格を持つ史料だと思われる。

問題は、これらの史料の信憑性である。内容を確認してみると、他史料には見られない記述も多い半面、北条氏康や上杉謙信、佐竹義重の小田城攻め、木田余落城の記事など、他史料からも確認できるものも多い。そのため、全面的な信頼性には欠けるものの、多気城が登場する文献史料は皆無という現状においては、十分検討する価値がある史料と判断したい。以上のことから、「北条嶽山再興」という記事も、ある程度信用するに値するものとして考えたい。

では、天正七年頃の多気城周辺地域は、どのような状況にあり、また誰により多気城は「再興」されたのだろうか。「明光院記」と図1を参照しつつ、多気城の歴史的位置を明らかにしたい<sup>94</sup>。

戦国期の多気城周辺地域は、小田城を本拠とする小田氏の支配下にあった。戦国期の小田氏は、南常陸の大部分を支配する大勢力であり、一時は北常陸を支配する佐竹氏と肩を並べるほどの存在であった。戦国期の南常陸の政治情勢は、上杉謙信や北条氏康などの大大名の影響を受けつつ、基本的には小田氏と佐竹氏との対立、それに付随する周辺国衆の離合集散という構図で推移していた。しかし、永禄十二年（一五六九）以降、小田氏の勢力は大きく後退していく。永禄十二年十一月、佐竹氏の客将である太田道誉が小田城を接收し、当時の小田氏当主である小田氏治は、宿老菅谷氏の居城、土浦城に後退したのである。翌元亀元年（一五七〇）、佐竹義重は、太田道誉を小田城城主に、同三年にはその子・梶原政景を城主とし、以後、小田氏が小田城に戻ることはなく、両者の対立関係は続いていた。

こうした状況に変化が訪れたのは、天正五年（一五七七）である。同年九月ころ、長年対立関係にあり、東国の政治情勢に大きな影響を与えていた北条氏と里見氏が遂に和睦し、「房相一和」と呼ばれる同盟関係になったのである<sup>95</sup>。これにより、長らく懸案であった房総方面への軍事行動が終焉したことを受けて、北条氏は以後、積極的に北関東方面へと進出することとなり、北条方であった小田氏らと、それに対抗する佐竹氏ら反北条東国諸領主との戦争が再び活発化する。

天正六年（一五七八）から八年（一五八〇）の状況を、さらに詳しく見てみよう。天正六年、北条氏が御館の乱により上野・越後方面に進軍すると、その隙を突くかのように佐竹氏らが攻勢に転じ、同年七月二十五日に小田氏方の「木田里」（木田余）城は「落城」し、氏治はまたも土浦城に後退している。こ



れにより、小田氏の劣勢は決定的になったと思われる。それを示すかのように、翌年正月には、多気城近くの「上菅間」（つくば市上菅間）で「見地」＝検地が行われている。担当奉行の片岡紀伊守は、佐竹氏家臣の片岡氏一族と思われることから、佐竹氏が徐々にその支配を強化していった様子が窺われる。そして、同年七月二十四日から「北条嶽山」が「再興」されている。その間、佐竹氏は、土浦城を攻撃したようであり、追い込まれた氏治は、ついに同年十二月、陸奥蘆名氏を仲介として、佐竹氏と和睦を締結し、事実上佐竹氏に従属することとなった<sup>88</sup>。これにより、南常陸の大部分は佐竹氏の影響下に入ることとなったのである。

一方で、こうした佐竹氏の進出に対抗して、北条氏に従属していた牛久岡見氏や江戸崎土岐氏も攻勢を強めていたようである。「同七月廿二日下妻館夜煙生、戌時也」とあることから、佐竹方多賀谷氏の居城・下妻城が攻撃されている様子が窺われるが、おそらく岡見氏・土岐氏による軍事行動だろう。これは、佐竹氏による土浦城攻め、「北条嶽山再興」とほぼ同時に行なわれていることから、それに対応した動きとみられる。翌天正八年二月二十四日には「谷田辺落城、甲午日ナリ」とある。これは、多賀谷氏の支城・谷田辺城が、岡見氏・土岐氏らにより攻撃されたことを示すと思われるが、他史料によると落城はしておらず（あるいは落城したがすぐに奪還されたとの説も）、日時も三月二十五日となっている<sup>89</sup>。いずれにせよ、氏治が佐竹氏に従属したことを契機として、佐竹氏・多賀谷氏と北条方岡見氏・土岐氏との戦争が激化している様子が窺われよう。

以上、簡単に当時の政治情勢の推移を検討してきたが、これにより、多気城の「再興」の意味も、おおそ推測が付く。まず、その築城主体だが、前後の記事の内容や当時の状況からして、佐竹氏で間違いあるまい<sup>90</sup>。そして、城の性格は、小田氏の佐竹氏への従属という、南常陸における大きな支配体制の変化と、北条方岡見氏・土岐氏らとの戦争の激化という状況に対応して、「再興」されたものと評価できよう。小田城が存在しながら、その近くに位置する多気城をわざわざ佐竹氏が「再興」した理由は、岡見氏・土岐氏を背後から支援する北条氏との本格的な戦争が、直近に行われると予測し、平城の小田城よりも要害堅固な城郭を必要としたからとも考えられようか。しかし、予測に反してか、結局すぐには北条氏がこの地域に進出することはなく、その後文献史料に

一切登場しなくなることから、多気城では戦争が起こることもなく、ほどなく廃城になったと思われる。

そして、以上の事実は、発掘調査の成果とも合致する部分が多い。先述のように、発掘調査では、火災や戦争の痕跡が見つかっておらず、臨時的な急造の城郭だったことが判明している。また、十六世紀後半の遺物も出土していることから、天正七年（一五七九）という年代もその範囲に収まる。このようなことから、先行研究で推測されていたように、多気城は、地域支配の拠点というよりは、十六世紀後半に佐竹氏により築造された、軍事的・臨時的な城だったことが、文献史学の観点からも十分窺われるのである。

以上のことから、多気城のおおよその歴史的 위치が判明したといえよう。しかし、もう一つ、検討すべき問題がある。それは、「再興」という言葉である。つまり、多気城は天正七年以前にはすでに築城されており、その後しばらくの間は廃城となっていたことも同時に判明する。しかし、発掘調査では、造り替えの形跡がないとされている。多気城の歴史的 위치を明らかにするうえで、「再興」とはいったい何を意味するものなのか、という問題にも取り組まなければなるまい。このことについては、無論、史料が存在しないため、先行研究で推測されている可能性を指摘するにとどまってしまうが、最新の研究状況を踏まえて、今少し詳しく検討してみたい。

まず、一つの可能性としては、永禄七年（一五六四）の上杉謙信の小田城攻めや、北条氏の小田城攻め、佐竹氏の小田城攻めなど、天正七年以前の度重なる戦乱時が挙げられる。特に、年未詳だが、佐竹氏の小田城攻め時には「二三ヶ所付城」<sup>195</sup>が築かれたことがわかっており、位置的にもその中の一つとして築城された可能性は十分にあるだろう。

その際、麓に位置する北条城との関係も考慮せねばなるまい。既に『筑波町史』でも指摘されているが、元龜三年（一五七二）霜月四日付け真壁氏幹官途状によると、深谷玄蕃亮に対して「近年北条へ罷越、日夜辛勞忝候」<sup>196</sup>と伝えている。また、近世の軍記物であるが、「小田天庵記」によると、永禄・元龜・天正頃に小田氏治と北条城主北条治高が対立している様子が描かれている<sup>197</sup>。この「北条」が、北条城のことを指すのか、あるいは多気城を指すのか、議論の余地があるだろう。また、これらが仮に多気城のことを指すとしても、造り替えの痕跡がないこととどう整合性を付けて説明するのか、遺構の改変を伴わ

ない「再興」がされたのか、などの問題が残る。

次に、十五世紀の室町時代の可能性である。先述したように、現在までの発掘調査では十五世紀頃の遺物が主体をなしている。遺物のより詳細な年代まではわかっていないが、注目すべきは、麓に位置する小泉館である。これも先述したように、小泉館は、明応五年（一四九六）の小田治孝と小泉顕家との内紛時に存在していたとされており、発掘調査の結果もそれを裏付けているようである。十五世紀に、小泉館とともに、多気城の地が何らかの形で使用されていた可能性がある。ただし、それが城郭として利用されていたかどうかという問題が残る。少なくとも、現存遺構は造り替えの痕跡がなく、遺物等からも十六世紀後半のものと判断せざるを得ない。何か別の形での利用の可能性が高い<sup>20</sup>。

最後に、鎌倉時代の「多気の山城」を意味する可能性である。これは、「明光院記」の性格からの推測にとどまる。「明光院記」の作者は地元僧とされる。僧侶の知識・教養として、鎌倉時代に郷土を代表する人物である多気太郎によって山城が築城されたことが『吾妻鏡』に記述されていることを認識しており、その地に佐竹氏が再度城郭を築くことになったことを「再興」と表現した可能性もあろうか。

このように、多気城に先行する「古城」とも言うべき城の姿は、現時点では不明とせざるを得ない。ただし、少なくとも十五世紀に何らかの形で多気城の地が利用され、十六世紀後半に多気城の現存遺構が築かれた、具体的には天正七年に築城され、使用期間はごく一時期のみで、再利用や改変されることなく現在に至った、ということは指摘できよう。今現在明らかにできることはこれ以上ないが、今後はこの地域の十五世紀から十六世紀の歴史的状況の解明を進め、近隣の小田城、小泉館、北条城などとの関係や、寺院・宿場・街道・他の中世遺跡との関係なども含めて、総合的に考えていくことが必要になってくるだろう。

## おわりに

本稿では、茨城県内有数の山城であるものの、その歴史的位置が不明確であった多気城について、「明光院記」に基づいて文献史学の観点から検討した。これにより、多気城が、天正七年（一五七九）七月二十四日に「再興」されたこ

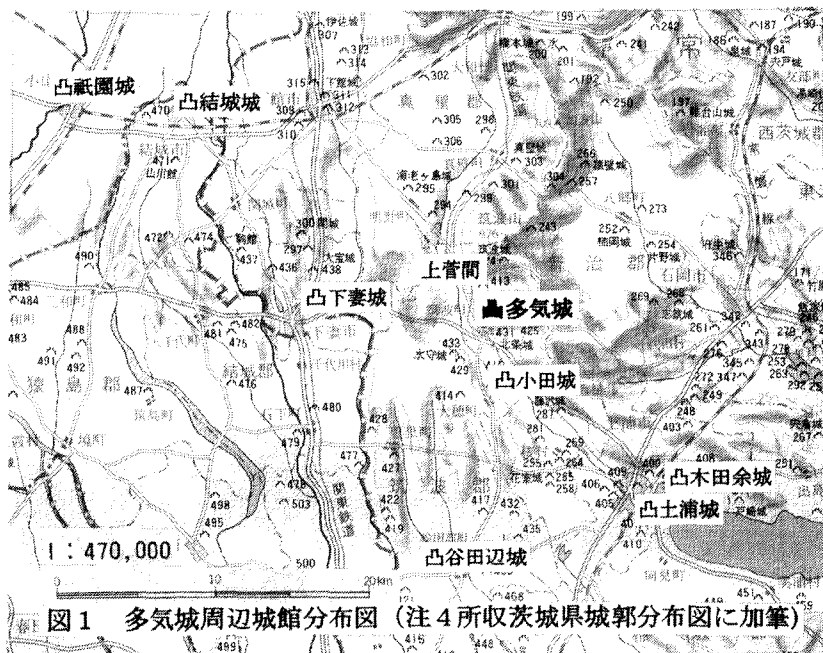
とを確認した。そして、その主体はおそらく佐竹氏であり、反佐竹氏である岡見氏・土岐氏、その背後に存在する北条氏との戦争に対応して「再興」されたものと推測した。発掘調査の年代観と文献史料による年代がほぼ合致したことは、大きな成果といえるだろう。佐竹氏が、果たしてそのような状況で、これだけの城郭を築城するものなのか、あるいはできるものなのか、「再興」前の城郭とは何なのか、今後はこうした問題点を意識しながら、「明光院記」の信憑性の問題や近隣城跡・遺跡との関係も含めて、慎重に調査研究を進めていくべきと考える。

また、城郭の「再興」というものをどう捉えるのか、という問題点も浮上した。全国各地の城郭で「再興」が行われていることは、多くの文献史料から確認できる。城郭の本質は臨時性にあるという松岡進氏の指摘<sup>95)</sup>も踏まえつつ、今後はこうした「再興」という言葉を通じて、城郭が戦国社会の中でどのように存在し運用されていたのか、その意味と性格は何か、などの問題を探っていくことも必要となってくるだろう<sup>96)</sup>。いずれも今後の課題としたい。

- 
- (1) この間の研究状況については、齋藤慎一「戦国大名系城館論覚書」(萩原三雄・小野正敏編『戦国時代の考古学』高志書院、二〇〇三年)、藤木久志監修・埼玉県立歴史資料館編『戦国の城』(高志書院、二〇〇五年)、齋藤慎一「戦国大名北条家と城館」(浅野晴樹・齋藤慎一編『中世東国の世界三 戦国大名北条氏』(高志書院、二〇〇八年)、萩原正雄・峰岸純夫編『戦国時代の城一遺跡の年代を探る一』(高志書院、二〇〇九年)などを参照。
- (2) 拙稿①「戦国前期東国の戦争と城郭―「杉山城問題」に寄せて―」(『千葉史学』第五一号、二〇〇七年)、②「境目国衆の居城と大名権力―相模津久井城掟の分析から―」(『千葉史学』第五三号、二〇〇八年)、③「戦国前期東国の城郭に関する一考察―深大寺城を中心に―」(一橋研究編集委員会編『一橋研究』第三四巻第一号、二〇〇九年)。なお、問題の根本の一つである、縄張編年の研究史整理をしたものとして、④「縄張編年論ノート―その研究史整理と課題―」(『城郭史研究』第二九号、近刊予定)がある。
- (3) 中世の小田・北条地域や小田城・小泉館についての最新の研究状況については、広瀬季一郎「中世小田の歴史的景観―小田城本丸跡発掘調査成果を中心に―」、大関武「中世筑波北条の歴史的景観―小泉館跡を中心に―」(いずれも市村高男編『中世東国の内海世界―霞ヶ浦・筑波山・利根川―』高志書院、二〇〇七年)を参照。
- (4) 茨城・栃木・群馬、新人物往来社、一九七九年。
- (5) 第一巻、新人物往来社、一九八五年。
- (6) 筑波町史編纂専門委員会編、一九八九年。
- (7) 茨城城郭研究会編、国書刊行会、二〇〇六年。「多気山城」の項は、樋詰洋氏執筆。
- (8) つくば市教育委員会編『平沢官衙遺跡・多気城跡 つくば市内重要遺跡試掘・確認調査報告 平

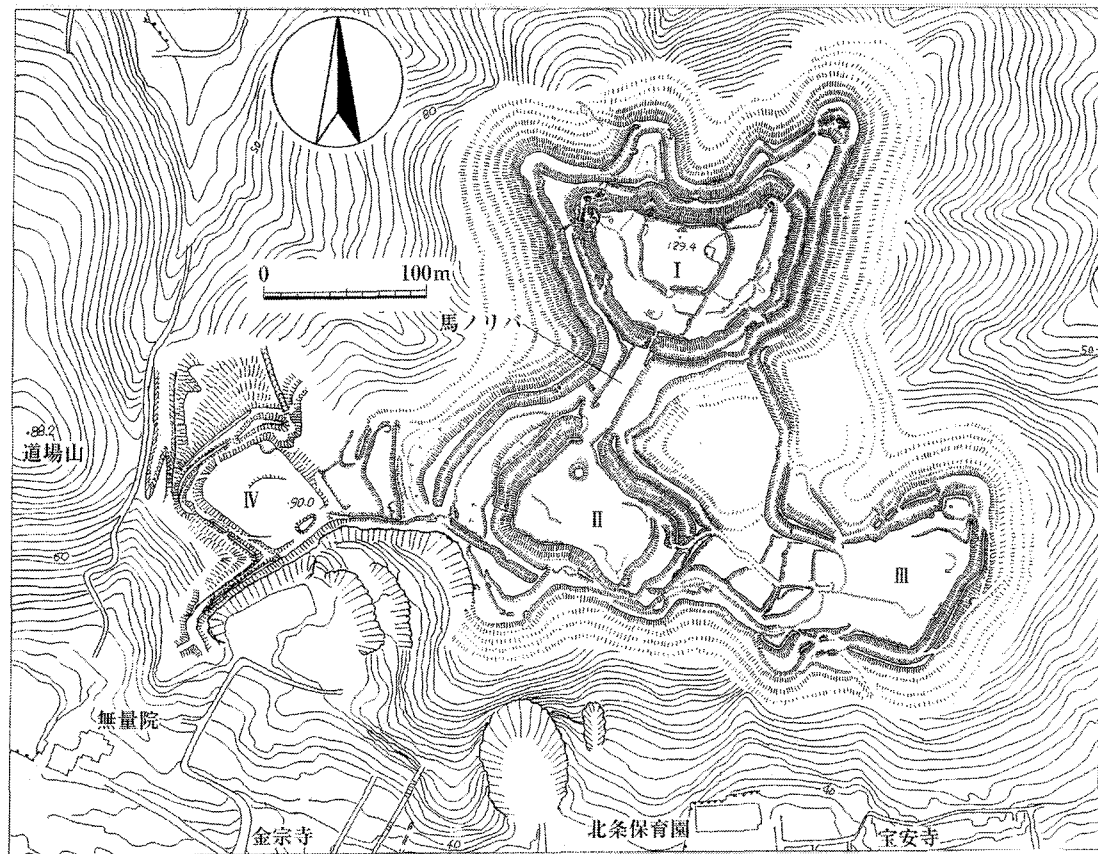
成十三年度』二〇〇二年。

- (9) つくば市教育委員会編『手子生城跡・多気城跡 つくば市内重要遺跡試掘・確認調査報告 平成十四年度』二〇〇三年。
- (10) 「明光院記」(『牛久市史料』中世Ⅱ<二〇〇〇年>，七一号，筑波大学附属図書館蔵「筑南年譜」)。
- (11) ただし，筆者とはほぼ同時に，余湖浩一氏が自身のHP (<http://homepage3.nifty.com/yogokun/>) 上でこの史料について検討を加えている(「多気城・多気山城」または「小田天庵と藤沢城」を参照)。
- (12) 『牛久市史料』中世Ⅱ(二〇〇〇年)，七二号，安得虎子一。
- (13) 『牛久市史料』中世Ⅱ(二〇〇〇年)，七三号，筑波大学附属図書館蔵「筑南年譜」。
- (14) 以下に叙述する政治情勢の推移は、『牛久市史』原始古代中世(二〇〇四年)に大きく拠っている。
- (15) 「房相一和」については，拙稿「房相一和」と戦国期東国社会」(佐藤博信編『中世東国論上 中世東国の政治構造』岩田書院，二〇〇七年)を参照。
- (16) 「小田氏治書状写」(『牛久市史料』中世Ⅰ<二〇〇二年>，一七五号，統常陸遣文十)。
- (17) 「多賀谷重経書状写」(『牛久市史料』中世Ⅰ<二〇〇二年>，一七八号，水府志料附録四十六)。
- (18) ただし，出土したかわらけが真壁系のもものとされることから，実際に普請にあたったのは真壁氏ら近隣国衆などの可能性もあろうか。
- (19) 「佐竹義重書状」(『筑波町史史料集』第八篇<一九八四年>，三八一号，那須文書)。
- (20) 「真壁氏幹官途状」(『筑波町史史料集』第八篇<一九八四年>，三七一号，北条深谷家文書)。
- (21) 「小田天庵記」(『牛久市史料』中世Ⅱ<二〇〇〇年>所収)。
- (22) 多気城がある城山は石材の産地でもある。実際に多気城では石列・石積みが施されているし，石造物らしきものの残骸も一部散見されている。十五世紀段階では，あるいは石材の供給源としての役割を果たしていた可能性もあろうか。
- (23) 松岡進『戦国期城館群の景観』(校倉書房，二〇〇二年)など。
- (24) この点に関して，筆者は前掲注2拙稿③にて，東京都の深大寺城の検討を行った。そこでは，深大寺城が十五世紀末頃に扇谷上杉氏の城郭として既に存在しており，天文七年に同氏により「再興」されたことを指摘し，それは発掘調査の成果とも合致するものであることを明らかにした。今後，このような検討事例を着実に増やしていくことが必要と考える。



1. 多気城跡(中), 2. 北条日向遺跡(古代・中), 3. 北条城跡(中), 4. 北条小学校遺跡(古代), 5. 中台遺跡群(旧～近), 6. 北条八坂神社古墳, 7. 小泉館跡(古墳・中), 8. 平沢ハザマ遺跡(古墳), 9. 平沢山下遺跡(古墳), 10. 平沢西遺跡(古墳), 11. 平沢官衙遺跡(古墳・古代), 12. 平沢古墳群, 13. 漆所上ノ台遺跡(縄文～古代), 14. 漆所古墳群, ①(多気本町)五輪塔, ②(北条八坂神社)五輪塔, ③(日向庵寺)板碑

図2 多気城周辺遺跡分布図 (注9より転載 1:25,000)



多気城縄張図（注7より転載。野口潔彦氏原図に樋詰洋氏がIV曲輪を追加・補正）